様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０２３９０

研究課題名（和文）若年出産女性にみる沖縄の貧困の再生産過程

研究課題名（英文）Investigation in Okinawa about reproduction of the women who bore a child in the youth

研究代表者
上間　陽子（UEMA, YOKO）

琉球大学・教育学研究科・教授

研究者番号：９０３８１１９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：沖縄県では、若年出生率が2.4%から2.6%で推移するなど全国と比べると2倍以上の数値となっている。本調査は、沖縄県において10代で出産した女性たちがどのような理由で出産まで至り、その後どのように生殖家族を作り出していくのかなど、彼女たちの家族の再生産過程を聴き取ることを企図して行われた。調査を通じてわかったのは、育児の状況や生殖家族の安定につながるのは、子どもの父親との関係よりも、実母（原母）との関係とピアグループとの関係によって決まる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
調査を通じてわかったのは、育児の状況や生殖家族の安定には、子どもの父親との関係よりも、実母（原母）との関係とピアグループとの関係に規定されているということである。これらを4つの象限に分類すると原母+ピアグループ+の女性たちは出産、育児といったことがらがみられ、原母+ピアグループ－においては出産や育児の支援ならびにキャリア形成についても実家の応援がもらえるなどがあった。反対に、原母－、ピアグループ＋においては、暴力の問題が突出して高く、原母－、ピアグループ－においては暴力の問題ならびに異性とのトラブルが持続的にみられるなどの出産、育児だけではなく生活全体が絶えず困難がみられることである。

研究成果の概要（英文）：In Okinawa Prefecture, the youth birth rate has changed from 2.4% to 2.6%, which is more than double the figure in Japan. In this survey, we will listen to the reproduction process of their families, such as why women who gave birth in their teens in Okinawa Prefecture led to childbirth and how they will create reproductive families after that. It was done intentionally. The survey found that the child-rearing situation and the stability of the reproductive family depend more on the relationship between the child's mother (original mother) and the peer group than on the child's relationship with the father.

研究分野：教育社会学

キーワード：若年出産　母子家庭　社会関係資本　沖縄

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

長く沖縄では、潤沢な地縁・血縁の相互扶助ネットワークが、人びとが貧困に陥ることを防いでいるとされてきた（八木正：1987 年）。しかし沖縄県の子どもの貧困率は 29.9%にのぼると発表されたほか（沖縄県：2016 年）、沖縄の低階層の若者の調査からは、かれらが親族や家族から除外されている実態ならびに社会関係資本が脆弱であるなか生活せざるをえないことが指摘されている（打越正行：2016 年、2017 年）。筆者は、こうした沖縄における貧困をめぐる問題について、これまで以下のような研究に関わってきた。

(1) 筆者が研究代表である共同研究「沖縄における若年者の移行過程に関するコーホート調査」（基盤 B：2007-2009 年）他の 5 カ年間、同一コーホートの若者を追跡するパネル調査研究に取り組み、非大都市定住者に様々な不利が集中していること、その点がとりわけ沖縄において鋭い形で現れていることを指摘した。

(2) 教育実践に関する研究（学部長裁量経費：2009―2012 年）： 2009 年から 2013 年の 5 年間沖縄県八重山地区の A 小学校において、2012 年度に下記(3)の対象者の若者が働く繁華街を校区として持っている B 小学校において、いずれの場合も虐待等が見られる過酷な生育環境で育つ子どものいる学校や学級で、子どもと教師及び子ども同士の関係づくりや授業づくりの共同研究を行なった。

(3) 筆者が研究代表である共同研究「沖縄地方におけるリスク層の若者移行調査」（若手 B：2012―2013 年）（基盤 C：2014－2016 年）：(1)のような統計調査では捕捉が難しい、既存の法体系のもとで合法／非合法のラインを行き来しながら生活するアンダーグランド化しがちな若者たち（以下ではリスク層とする）がおかれた実態を把握する調査で、2012 年から 2017 年にかけて、沖縄をフィールドとして 10 代から 20 代前半の中卒・高校中退の若者を対象とした継続的なインタビュー調査を実施し、無業・失業と違法就労・性風俗産業を行き来しながら働いている若者の移行過程の特徴と、定位家族・生殖家族の特徴を指摘した。

(4) 筆者が研究代表である共同研究「沖縄県の貧困に関する総合的調査」（基盤 C：2014－2016 年）：沖縄県の児童生徒の学力実態の分析として、2013 年と 2014 年の全国学力・学習状況調査の沖縄県の小・中学校の悉皆データを分析した。

(5) 筆者が研究代表である調査「沖縄の若年出産をした女性への聞き取り調査」（公益財団法人みらいファンド沖縄：2017 年）：(2)の調査協力者の女性の 7 割が若年出産をしており、生殖家族の形成過程に重層的な困難が集中していることがわかったことから、子どもを育てている若年出産女性へ焦点を絞り、聞き取り調査を実施した。

特に(1)(3)を通じて明らかになったのは、リスク層の若者の生育過程に、その貧困状況と絡んだ「性」と「暴力」の問題が頻出していることであり、それらの問題は、沖縄の親族関係・地域コミュニティのあり方が背景となって発生していることも少なくないということである。問題解決のためになされるべきことは多々あるが、さしあたり学校教育が問題の存在を直視し、教育実践の課題として取り組むことはその要のひとつをなすと考えられる。

しかし(2)(4)にみるように、沖縄の学校教育界では、2007 年の全国学力テスト最下位のショックの影響も強く、親の教育姿勢と倫理が第一義的に問われ、学校においては到達度テスト・Web テストの導入とともにドリル学習による個別学習の徹底が推奨されている。そのため厳しい生活状況のもとで育つ子どもや親の苦難を丁寧に読み解き、そのことについて関係者がじっくりと検討し合うことができない状況が広がっている。

こうした状況は、(5) において聞き取りの対象である若年出産をした女性たちにおいて違いとなって現れている。というのも、①世代を問わず貧困状況があること、②選択している職業の同質性が指摘できること、③世代を問わず第一子の出産時の年齢のリスクの差異があること（16 歳で出産したものと 18 歳は中断体験が異なり、それゆえその後の危機が異なる）、④ネットワーク形成の世代的な差異があること、⑤ネットワーク形成の差異には学校体験の差異が少なからず影響していることなどがうかがえる。②をやや詳しくいうと、現在、子どもを育てるために無職となっている方は 5 名おり、働いている方は 18 名となっているが、18 名のうち正社員は 2 名、非正規のサービス業 14 名、建築業 2 名となっており、いずれも貧困ラインぎりぎりで生活をしている。また 14 歳から 15 歳の間に風俗業界で仕事を開始している方が 18 名となっており、業界への参入の障壁はほとんどなかったものの、出産するなどして業界を離れたことを「抜け出すことができた」体験として語っている。また未入籍や離婚するなどして単身で子どもを育てているものの、養育費や慰謝料をもらっている方は皆無であり、結婚している方も含めて多くの方が困窮状態のなか子どもを育てている。

こうした傾向は世代を問わずみられるわけだが、その一方で⑤のネットワークの形成の仕方には違いがあり、孤立の程度に違いがある。たとえば 20 代の女性たちは、中学生時代に形成したネットワークがその後も持続しているのに対し、10 代の女性たちは小学校高学年から中学生時代には不登校になるなどして、脆弱なネットワークしか持たないなかで SNS などを使用し空間を共有しない形でネットワークを形成している。ここからは 20 代の母親たちが、学校につなぎとめられ反学校文化を身につけるなどしながら中学校時代のネットワークを形成

し、その後も子育てや家族の問題を共有している一方、10 代の母親たちはそうした機会を持てないなかで社会に押し出され、子どもを媒介とすることで新しいネットワークをつくり、子育てをしているように見受けられる。
こうしたことを背景にし、10 代で母親になった女性たちの 20 代のグループと 10 代のグループには世代的な差異があるのか、あるとしたらそれはどのような差異だといえるのかについて考察を深める必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の三点であった。
（１）一般に様々な調査研究の対象から漏れ落ちがちであるアンダーグラウンド化している若年出産女性に対する聞き取り調査を実施し、貧困と教育問題の先鋭な現れについて、特にその沖縄の場合について具体的、かつ詳細に明らかにする点。
（２）（１）をベースにすることで、彼女たちにとって家族をつくることの意味を踏まえたうえで具体的な介入や支援方法について提案する点。
（３）アンダーグランド化している若者の調査においては、とかく調査協力者の数が少ない傾向がある。だが本調査では、一定の数を調査対象としていることからある程度の傾向性を指摘できる点。

３．研究の方法

本調査は、次の 2 つの調査からなっており、以下の両方を並行して実施した。
（１）若年出産女性７７名を対象とした、継続を予定しない１回から 2 回の聞き取り調査から構成される「調査Ａ」。
（２）女性のなかでも困難が集中している女性と、調査Ａからとくに困難が集中していると思われる女性５名を対象とした追跡調査を実施する「調査 B」。特にこれらのケースからは、子どもが育つために必要とされる支援について考察した。

４．研究成果

　コロナ禍ということもあり、研究計画当初の目標としていた 80 名の人数には届かなかったが、77 名の方に聞き取りを実施することができた。
　そのなかで分かったのは以下のことである。
　まず働き始めた年齢が 18 歳以下が１名をのぞき 47 名となっており、キャバクラが 42 名、ハード系風俗店が 4 名となっていた。こうした形で働き始めるのは、定位家族で暴力の問題を抱えている、あるいは生殖家族における暴力の問題を抱えているなどがあり、51 名の方が暴力の被害者、1 名の方が家族に対して暴力をふるっていることがわかった。ただ、行政や警察、児相などの介入のあった方は 19 名と少なく、彼女たちの受けている暴力は見過ごされている場合がほとんどであった。
こうした状況の中で起きているのは、暴力の体験を語ることができないということであり、また語り始めたときにも暴力の体験は「隠れて」しまい、別の体験として語られたり、暴力の程度を著しく低下させた形で語られることになる。彼女たちの多くは暴力によるトラウマを抱えているように見られたが、それらは何らかのアディクションによって逃れようとされているが、それゆえに、問題を解決することが難しく、学校や医療や福祉といった介入を難しくさせていることがわかった。 とはいえ、若年出産をした女性たちの生活や子育ての状況については違いも多い。これらを規定しているのは、パートナーとの関係ではなく、原母との関係とピアグループとの関係になっていることもわかった。これらを軸にして原母との関係+、ピアグループとの関係+の第一象限グループ、原母との関係+、ピアグループとの関係－の第二象限グループ、原母との関係－、ピアグループとの関係－の第三象限グループ、原母との関係－、ピアグループとの関係－の第四象限グループに分類した。こうした分類をすると第一象限、第二象限のグループには 10 代女性も 20 代女性もまんべんなくいるが、第三象限、第四象限グループにおいては、10 代の女性の存在が多くみられており、彼女たちに対する介入などがほとんどなされていないということである。この点の介入方法を考えていくことが必要であると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 上間陽子	４．巻 増刊号
２．論文標題 貧困問題と女性ーー風俗業界で働いている女性たちの聞きとり調査から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 女性の生きづらさ---その痛みを語る こころの科学増刊	６．最初と最後の頁 50－60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上間陽子	４．巻 387
２．論文標題 沖縄の若者たちの生活ー二つの社会調査から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Ｈｕｍａｎ　Ｌｉｇｈｔｓ	６．最初と最後の頁 14－22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 上間陽子
２．発表標題 『裸足で逃げる』の若者たちの仕事・学校・日々のこと
３．学会等名 デートDV防止スプリングフォーラム（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

１．著者名 上間陽子	４．発行年 2020年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 240
３．書名 海をあげる	

１．著者名 岸政彦・打越正行・上原健太郎・上間陽子	４．発行年 2020年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 439
３．書名 地元を生きる	

１．著者名 上間陽子	４．発行年 2018年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 319頁（うち78ー93頁）
３．書名 世界	

１．著者名 信田さよ子・上間陽子	４．発行年 2022年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 352
３．書名 言葉を失ったあとで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関